

大井実の  
BOOKな話

福岡市内で書店『ブックス  
キューブリック』をいとなむ  
大井実さんの、本のある日  
常をつれづれに。

文／大井実  
撮影／川上信也

輝きを失わない古典作品の素晴らしさを  
あらためて感じた、春のとある日。

本を読んでいると、ラジオやテレビから今まさに読んだ言葉が聞こえてくることもある。ユングがいうシンクロニシティという現象だろうが、数年前の春、九州国立博物館で開催された『若冲と江戸絵画展』でそんな体験をした。春の陽気が眩しいある日、夏目漱石の『草枕』片手に電車に乗り込む。

『草枕』は、高校2年の時に買った文庫だった。活字の横には、難しい単語の意味が書き込まれている。それもそのはず、『草枕』は漱石が「天地開闢以来類のない小説」と呼んでいたとおり、古今東西の小説や詩、芸術作品などが多く引用された高度な小説で、高校生がすんなり理解できる代物ではない。

冒頭に出てくる「山道」は熊本の金峰山を指し、漱石の教師時代の体験をベースに書かれたことなどは、最初に読んだ時は知らなかったと思う。それから30年近く、「兎角に住みにくい人の世」もだいぶ体験したことや、作中の季

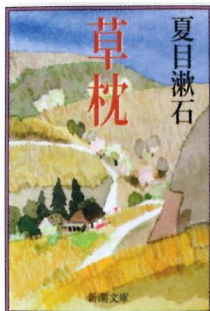
節が同じ春であったことなどから、ずいぶん興味を持って読むことができた。

展覧会では素晴らしい作品に出会い、充実した余韻に浸りながら帰りの電車で続きを読む。そしてふいに声をあげそうになった。主人公が泊まった宿の部屋の壁にかかっていたのが、まさに今見た若冲の鶴の絵だったのだ。さらにその数ページ前には、これも今見たばかりの長沢芦雪の作品まで登場している。あまりの偶然に背筋が寒くなった。

昨年の若冲ブームは展覧会のコレクションをしたアメリカ人によるものらしいが、なんのことはない、日本の文豪がすでに100年前から評価していたのだ。ちなみに大好きなピアニスト、グレン・グールドも『草枕』の熱心な読者だった。一種の隠遁者だったがこの作品にひかれたのも理解できる。

展覧会のコピーは確か「江戸の先端今も先端」、輝きを失わない古典の力を体感した一日だった。

『草枕』  
夏目漱石／新潮文庫／  
420円（税込）



『モーツァルト：  
ピアノ・ソナタ集』  
グレン・グールド／ソニー  
ミュージックジャパンイ  
ンターナショナル(ソニー  
クラシックス)／1,680円  
(税込)

